



## 保育と社会福祉を

### 漫画で学ぶ 23

#### 「問題のある保育園」

迫 ともや  
(比治山大学)

さいおなお氏の漫画、『問題のある保育園』を紹介します。さいおさんは保育園で3年間勤務した後、独立してベビーシッターをしながら漫画を描かれています。『問題のある保育園』には、ドキュメンタリータッチの保育園あるあるエピソードが満載。「保育の仕事って大変というけど、何がどんなふうに変なの？ 毎日子どもと遊んで、楽しそうじゃん？」と思う方は、ぜひご一読ください。

本エッセイの筆者は、保育士や幼稚園教諭を目指す大学生と日々接しています。保育のイメージが「なんとなく楽しそう（楽しそう？）」という学生たちが、実習で鍛えられたり、心を折られたりする様子を目にしています。筆者自身も小さな保育園で園長をしていましたので、実習生や養成校の先生方の対応をする立場でした。「あの園はブラック」と言われたいよう注意をしながら、近隣の園の噂などにも聞き耳を立てていました。

現在、日本では保育者（仕事として保育をする人）の公的な資格・免許として保育士資格と幼稚園教諭免許があります。養成校である大学などに在籍して保育士資格を取得するためには、座学での単位取得に加えて、保育所または保育所機能のある認定こども園と児童福祉施設で、計3回の実習が必要です。それぞれの実習で「80時間以上、10日間以上」の実習が必要です。幼稚園教諭免許の取得についても同様に、座学に加えて「160時間以上、4週間以上」の実習が必要です。幼稚園実習は2回程度に分けて実施する養成校が多いです。養成校には短期大学、専門学校、四年制大学など、在籍期間が違う学校がありますが、在籍期間が短いほど座学と実習の間隔が短くなり、スケジュール設定が厳しくなります。筆者も二年制の短期大学で勤務した際、学生たちが全員でマラソンを走るかのように頑張り、自分も同じペースで伴走をしていた記憶があります。

大学3年生、はじめての保育実習。さいおさんは2歳児クラスに。実習日誌は1日分がA4用紙で4枚。当日分の下書きと前日分の清書で2回書く。もちろん手書きだ。実習から帰宅して日誌作成。疲れて寝ても、起きたら実習先へ。2歳担任のキビシ先生は、さいおさんが挨拶する際、カバンをおろしていないことを注意するが、他の先生が同じことをしていてもスルーしてしまう。キビシ先生はさらに、「帰り際ってちゃんと先生全員に挨拶してる？」「されてないっていう先生いたからさ、実習に来てる立場も考えるんだよ」と注意。

さいおさんは内心、「保育士さんって意外と上下関係厳しいんだなあ…」とつぶやく。

園の荷物おきで作業中のさいおさん。他の保育士から「どうですか、実習生？」と聞かれたキビシ先生は、さいおさんがものかげで聞いているのに「ダメっばいですね」と言ってしまう。めげそうになりながらも「あと少し」と頑張っ、なんとか2週間の実習を終わらせた。（「序章 保育の世界へようこそ」より）

実習生をみる保育者の視点は、「保育者として働く人」と「学生さん」の二重になっているように思います。「保育者として働くなら、これくらいできないとね」というものと「学生さんだから、ここは鍛えて、伸ばしてあげないとね」というものです。この二重の視点は、ときにダブルスタンダードの原因になります。同僚にしない注意の声かけを、実習生にしてしまうのはその典型例。「理不尽な扱いをされた」という学生の訴えに繋がりがねません。実習生自身にも「社会人」と「学生」の二重の役割を求められることが分かっていたら、うまく対応できるかもしれないのですが、友達や先生たちがいる学校を離れて自分ひとりの実力を試される場にいることだけで精一杯の実習生もたくさんいます。

普段なら乗り切れることが実習の場では上手くできなかつたり、逆に学校では今ひとつの評価しかもらえない学生が、実習の場では輝きを放つたりと、現場のもつ力は不思議なものです。

大学卒業後、就職した保育園。さいお先生は1年先輩のユガミ先生と2歳児クラスに配属されている。人一倍甘えん坊のAちゃんはユガミ先生のお気に入りだ。さいお先生に抱っこされる様子を見たユガミ先生は「え～、Aちゃんはユガミせんせいのこと好きなんじゃないの～？ 裏切者めっ」と言い放ち、「Aちゃんのコップだけナイナイしちゃお」とコップを片付けようとする。Aちゃんは愛情を試されて泣いてしまう。

さいお先生が、ユガミ先生の言動を園長に相談したところ、ユガミ先生は園長に呼び出されて注意を受ける。しかしユガミ先生は「すれ違っちゃった」としか捉えられず、園長が見ていないところでAちゃんの感情をおもちゃのように扱い続ける。ユガミ先生はAちゃんと遊んでいるつもり。だがAちゃんを泣かせる「遊び」はどんどんエスカレートすることに…。

（「第2章 新卒保育士 vs 歪んだ愛の先生」より）

新卒1年目の保育者は、たとえ1年だけでも先輩の先生には、違和感を伝えることが難しいです。自分はまだ慣れるだけで精一杯なのに、相手は勤務園のこと、園児達のことをよく知っている。そうすると、「なんか変だな」と思いながらも「どこでも、こんな感じかもしれない」「自分が考えすぎなのかな」と違和感を飲み込むことになりがちです。

ここで大事になってくるのは、園長や隣のクラスの保育者が気にかけることです。自分のクラスの様子を客観的にみることには簡単ではありませんが、隣のクラスのことには案外気づくものです。保育者の力量だけでなく、園児達との相性もあるのでしょう。「隣の〇〇組さん、すごく落ち着きがないなあ…大丈夫？」などと感じさせられることがあります。若手の先生がいるなら、躊躇なく声をかけて、よりよい保育のためにできることを一緒に考えるようにしたいものです。これはきれいごとではなく、風通しのよい組織を作るために大事なことだと考えています。

さいお先生のエピソードでも、ヘルプに入った他の先生が、実はユガミ先生がAちゃんを泣かせすぎ

ていることを気づいている、という場面が出てきます。気づいているなら、早めに声をかけるか、せめて園長には伝えておく等して欲しいものだと思います。2歳児のAちゃんは、自分がされていることを遊びなのか、いじめなのか判断できません。親に伝えることも難しい年齢です。また親も、送り迎えの際の様子しか見ることができません。お迎えの際にお子さんが泣いてしまっても、保育者が笑顔で「日中は楽しく遊んでいますよー」と言うなら、それを信じる以外にありません。

10月、運動会が終わってほっとしていると「じゃあ次は発表会だね」。1月の発表会の準備が始まる。2歳児クラスの劇の準備では、クラスの子全員のセリフを多すぎず、少なすぎずに調整し、登場回数も同じくらいにしなければならない。手作り衣装は、試作品を作って園長のOKをもらってから、クラスの人気分を作る。「持ち帰り仕事と残業は禁止」だが、さいお先生たちは園長の退勤後に職員室でこっそり制作せざるを得ない。12月中旬、練習が佳境に入ると園長が全クラスに厳しい指導を行い、普段は視野が広く穏やかなシヤヒロ先生まで園児を叱りつけてしまう。

発表会当日、どうにか全ての出し物を終わらせ、解放感にひたると、次は節分、ひな祭り、卒園式…。  
(「第4章 発表会の舞台裏」より)

保育の現場では行事が多く、毎月何かの準備と振り返りに追われます。同時進行でいくつかの行事担当になることも。行事のたびに手作り物を作ることになると、サービス残業や持ち帰り仕事が多くなります。それは保育者の業務負担を圧迫し、追い詰められた保育者が園児に乱暴な言葉をぶつける原因になります。行事の見直しや、手作りものの簡略化は、ICT導入と同じく、保育者の業務負担の軽減に必要な工夫だと考えます。

保護者の目線からは、わが子の成長が感じられる行事は嬉しいものです。しかし、「行事のために園児に出し物をさせる」のであれば、果たしてどれだけの教育効果があるのでしょうか。歌や鼓笛隊、ダンスや劇など、やりたい子は楽しいでしょう。でも、静かに絵本を読んでいた子もいるはずです。「大好きな先生が言うからやらなければ」と思わせたり、「協調性を育むため」と行事を意味づけたり…本当にそれが良い保育なのでしょうか。

保育者自身も、絶え間なく行事の準備・練習・後片付けをしながら日々の保育ルーティンをこなすために、かなりの無理をしているはずです。しかし、行事で感じられる園児たちの成長の姿や、園児の生々しい感情と触れ合うこと、保護者からの感謝の声と行事が終わった時の解放感などが無いまぜになって「やってよかった」という強い達成感が味わえます。準備で散々追い込まれて、辛くなればなるほど「大きな報酬」に感じられるのでしょうか。ただ、もしも「過剰な負担と大きな達成感のループが癖になって、困難な状況を変えようとしなくなっている」のであれば、言い方は悪いですが、DVの被害者が加害者から逃げようとしなくなる構造と、それほど違わないように思うのです。

つまり、DV被害者はひどい目にあわされても、謝罪されると「この人(加害者)には自分しかいない」と感じさせられてしまい、そう思えることが報酬になって、加害的な状況から逃れられなくなるというものです。行事を推進する園長らをDV加害者と同じだと言いたいのではなく、保育の過剰な業務負担がDV的な状況を生んでいるのではないか、という問題提起です。実は園長も、この状況に巻き込まれている被害者のひとりかもしれません。

保育園などの行事は、言うまでもなく園児のためのものです。年齢別クラスで「○歳児組は△△をすることになっている」みたいな縛りはなくして、異年齢グループで音楽が好きな子ども、劇が好きな子ども等に分かれて出し物をするにはできないでしょうか。クラスごとの活動時間の制約などがあって難しいかもしれませんが。

保護者目線からは「うちの子の出番が少なすぎる」とか「○○ちゃんよりうちの子の方が上手なのに」とか「みんな平等に」とか、色々なご要望が出ると思われます。保育者は様々な配慮点をふまえてできる限りの工夫をするのですが、全ての保護者の要望をかなえることは容易ではありません。無理をすると、やたら登場人物の多い大味な劇になったり、繰り返しばかりの楽器演奏になったりします。

どれだけやっても改善を求める意見は際限なく出てくるものなので、熱心な保育者ほど疲れ果ててしまい、「誰のための、何のための行事なんだ！」と爆発してしまいそうになります。

「不適切保育」が様々に報道されています。保育の営みは、一部分をある角度から切り取れば「不適切」と見えてしまうことが多く、現場で奮闘する保育者の心を折るような論評がされてしまうことも事実です。ただ、保育現場で当たり前のこととされている業務や、保育者の言動の中に、実は「問題」と隣り合わせのものがあるかもしれない。そんなことを考えさせられる一冊です。

紹介作品：

さいおなお（2023）『問題のある保育園』オーバーラップ

※本エッセイで紹介した作品中のセリフなどは、読みやすくするために、意図を損なわない程度に改変している場合があります。

※ご感想・ご意見などは筆者のメールアドレスまでお寄せください。⇒ [sakotomoya@gmail.com](mailto:sakotomoya@gmail.com)